

(一社) 東洋音楽学会 西日本支部だより

Newsletter of the West Japan Chapter, Society for Research in Asiatic Music

第86号 (2017年9月15日)

定例研究会のご案内

※2回分の定例研究会のご案内をいたします。
はがきでの案内はいたしませんので、こちらでご確認ください。

東洋音楽学会西日本支部 第277回定例研究会のお知らせ

日 時：2017年9月30日(土) 13:30~16:30

場 所：京都教育大学 音楽演奏室

J R奈良線で「J R藤森駅」下車徒歩約3分

もしくは京阪本線「墨染駅」下車徒歩約7分

例会担当：田中多佳子(京都教育大学)

○博士論文発表(13:30-15:20)

1.北東カンボジア山地民クルンの音響的参与の民族誌—気分と精霊
井上 航(京都市立芸術大学)

2.ジョージア(グルジア)の民族的文化遺産としての合唱「ポリフォニー」
—20世紀の民俗音楽研究と文化政策を中心に
久岡 加枝(大阪大学)

○研究発表 (ワークショップ付き) (15:30-16:30)

3. ポリリズムが生み出すグルーブと身体的律動に関する考察

ーカメルーン都市部におけるヒップホップ・カルチャーの発生現場

矢野原 佑史 (京都大学)

東洋音楽学会西日本支部 第278回定例研究会のお知らせ

日 時：2017年11月18日(土) 14:30～

場 所：大阪大学吹田キャンパス人間科学研究科 東館404号室

阪急電車千里線 北千里駅(終点)下車 東へ徒歩 約30分、

大阪モノレール 阪大病院前駅下車 徒歩約5～15分、

阪急バス・千里中央発「阪大本部前行」、「茨木美穂ヶ丘行」、

北千里発「阪大病院線」※千里中央発北千里経由もあります。

近鉄バス 阪急茨木市駅発「阪大本部前行」(JR 茨木駅経由)

いずれも阪大医学部前または阪大本部前下車 徒歩約5～15分

例会担当：福岡 まどか (大阪大学)、伊藤 悟 (京都文教大学)

《タイ王国北部、ランナー伝統芸能のいま》

1. 「はじめにーランナー王国と伝統芸能」

馬場 雄司(京都文教大学総合社会学部 教授)

2. 「Transformation of Lanna Traditional Music from the Past to Present Time.」

Thitipol Kanteewong

(Assistant Professor, Faculty of Fine Arts, Chiang Mai University, Thailand / 総合研究大学院大学文化科学研究科 博士課程 非会員)

3. 「タイ王国チェンマイ県の歌師チャンソーの取り組みー即興歌謡ソールの学習と教授方法を中心に」

伊藤 悟

4. コメント

馬場 雄司

* * * * *

定例研究会の記録

東洋音楽学会西日本支部第274回定例研究会

日時：2016年10月16日（日） 13：30～

場所：京都教育大学（藤森学舎）

《修士論文発表》1

発表者：竹下 秋雄（九州大学）

発表タイトル「明治撰定譜筆策譜の旋律パターンについての一考察
——MGDP手法を用いた分析の可能性——」

雅楽の楽譜は奏法譜であるため、五線譜に訳譜した音符を分析するのみでは適切に音楽構造を捉えることができない。本研究は、統計的パターン分析手法であるMGDP手法（Maximally General Distinctive Pattern Method）を、明治撰定譜筆策譜の分析に適用することにより、この楽譜にみられる特徴的なパターンを抽出するとともに、抽出されたパターンが筆策の旋律の音楽学研究にどう役立つかを知ることを目的とした。発表内容は、2015年度提出の九州大学修士論文「音楽情報処理手法を用いた雅楽の明治撰定譜のパターン分析」にもとづく。

まず、明治撰定譜の筆策譜全72曲を計算機に入力しデータ化した。データ化の前提にセルの概念を規定した。明治撰定譜では絶対的な音高が認識できない。そこで唱歌における大きな仮名一字を中心とする仮名と運指の複合体を、パターンの最小単位と認識しセルとした。入力したデータの合計行数は677行、合計セル数は10832セルである。セルの組み合わせによりパターンを記述した。

次に、入力したデータを、六調子および拍子の全12条件で比較した。うえ、MGDP手法を適用した。MGDP手法とは、2010年にD.コンクリンらによって提唱された「もっとも一般的かつ特徴的なパターン」を抽

出する解析手法である。MGDP手法では、特徴性の判定と一般性の判定を、別々に行い統合する。特徴性の判定は、パターンPが分析対象群において特徴的である度合いを、分析対象群と背景群を比較することにより行う。特徴性は、あらかじめ設定した基準値と特徴値 ΔP との比較により判定される。本研究では、 $\Delta P \geq 5$ のときパターンPが特徴的であるとして分析を進めた。他方、一般性の判断は、パターンの包含関係にもとづいて行う。例えば、パターン {A} がパターン {A+B} を包含するなら、パターン {A+B} よりも一般的であるとみなす。

次に、抽出されたMGDPパターンの音楽的な意味を検討し分類を行った。この結果、抽出されたMGDPパターンは、1) 旋律パターンの発見を助けるパターン、2) 楽譜の記述方法の理解を助けるパターン、3) 旋律パターンの接続の傾向を示すパターンの三種に分類された。1) のMGDPパターンに注目することにより、筆策に特徴的な旋律パターンとその変形パターンを多数抽出することができたことから、雅楽の旋律研究でのMGDP手法の有効性が確かめられた。他方、2) 3) のMGDPパターンは、直感的には旋律パターンとは認識されないパターンであるが、これらのパターンに注目することにより、明治撰定譜における唱歌と運指の組み合わせの特徴、複数の旋律パターンの接続に関する規則性の解明などの研究が可能になると期待できる。

(竹下 秋雄 記)

《博士論文発表》2

発表者：藺田 郁 (大阪大学)

発表タイトル「猿倉人形の成立・活動・上演様式—近代日本の地方における大衆文化の生成—」

本発表は、発表者が2015年6月に大阪大学大学院文学研究科へ提出した博士学位請求論文をもとにしたものである(論文タイトル『猿倉人形の成立・活動・上演様式—近代日本の地方における大衆文化の生成—』)。猿倉人形は明治の中頃、東北地方で成立した片手遣い(ハサミ式)の人

形芝居である。明治末から昭和初期にかけて秋田県と山形県を中心に東北地方で数十の座が誕生し、多くの座が巡業による興行活動を展開した。その活動範囲は東北地方以外にも東京などを含め東日本の広い範囲に及び、なかには全国的な規模を誇った座もあった。博士論文の目的は、そうした猿倉人形の実態を三つの視点（成立・活動・上演様式）から捉え、それぞれの具体的な内容を明らかにして、近代の大衆文化のなかに位置づけようとするものである。

発表ではまず博士論文の目的と先行研究、そして論文構成の概観を述べ、続いて各章について略述的に説明した。論文全体は序章に始まり、第一章から第四章まで設け、最後に結論へ至る構成となっており、内容的には、第一章、第二章で成立およびその背景、第三章で興行活動、第四章で上演様式について論じている。本発表では、そのなかから第二章第一節を重点的に取り上げた。論文の目的は先に述べたとおりであるが、考察の焦点はこれまでほとんど行われてこなかった音楽的な側面に目を向けて、それによって猿倉人形の大衆的な芸能としての芸態と興行活動のありようを明らかにすることである。この節では猿倉人形が大衆的な芸能の影響を受けながら、独自の上演スタイルを形作る過程を論じており、特に芸態に関わる問題が焦点となっている。発表では猿倉人形が影響を受けた芸能（万作芝居）との比較を通じて、猿倉人形の上演形式が、特徴的な素早い人形操作と囃子を活かすために、「踊り」と「芝居」で構成される芸能形式から、「語り（フシ）」、「芝居（セリフ）」、「踊り（囃子）」で構成される芸能形式に「改良」されていることを示した。

本発表のような近代の地方における人形芝居に関する研究は、周縁的でほとんど関心が向けられない。しかし、対象の範囲を大きく広げて、猿倉人形と同じ成立背景をもつ他の近代の人形芝居などにも比較の目を向けることで、将来的に近代の芸能史における重要な問題の提起へと繋がることを期待される。ただ、本論文では、考察分析に用いる映像資料なども含めた一次資料が十分に収集できなかったため、成立過程の実証的な部分に関する考察などに不十分な点がある。今後は、まずそれらに関わる資料の洗い直しとともに考察を見直しする作業が必要であると思われる。

(藺田 郁 記)

東洋音楽学会西日本支部 第276回定例研究会

日時：2017年6月10日(土) 13:30～

場所：同志社大学今出川キャンパス

※今回は東洋音楽学会西日本支部、日本本音楽学会西日本支部の合同例会のため、以下の3件のレポートは、同文を日本音楽学会西日本支部通信13号(9月中旬発行予定)に掲載予定である。

《博士論文発表》

発表者：井上 春緒

発表タイトル「ヒンドウスターニー音楽の成立ーペルシャ語音楽書からみる北インド音楽文化の変容ー」

〈要旨〉

ヒンドウスターニー音楽は、13世紀頃から北インドを征服したムスリム王朝の宮廷音楽として発展した。そのため、南インドのカルナータカ音楽と比較し、外来のペルシャ文化の影響を強く受けているとされてきた。しかし、先行研究においては在来のインド音楽が、外来のペルシャ音楽とどのように混淆し、変容していったのかについては具体的に論じられてこなかった。博士論文においては、自明のものとされてきた音楽文化の交流の歴史をたどり、ペルシャ語音楽書に書かれたリズム理論を一つの事例として、北インド音楽文化の変容過程を明らかにした。

本発表では、14-18世紀にペルシャとインドで書かれた6冊のペルシャ語音楽書を取りあげ、そこに書かれている、リズム理論に関する記述を概観する。その上で、6冊の音楽書を並列して表示し、それぞれの影響関係及び、それらの音楽書におけるリズム理論の特徴を提示する。

発表の最後では、拍節を組み替えるペルシャのリズム理論に見られる特徴を備えた即興演奏をデモンストレーションし、インド在来のリズム奏法と比較する。それによってヒンドウスターニー音楽におけるペルシャの影響を演奏を通して明らかにする。

〈報告〉

本発表は北インドのヒンドゥスターニー音楽におけるペルシャ音楽とインド音楽の融合を15世紀から18世紀のペルシャ語音楽書におけるリズム理論を読み込むことで跡づけたうえで、今のヒンドゥスターニー音楽と比較するという意欲的な博士論文の発表である。ヒンドゥスターニー音楽は「ターラ」というリズム型の枠の中で即興演奏を行うものであるため、リズムは（旋法体系を意味する「ラーガ」とともに）音楽演奏の根幹を成している。

発表者によると、北インドでは紀元前からサンスクリット語文献において音楽理論の記述が行われてきた。これに対し13世紀以降はイスラーム王朝の影響から、音楽書は主にペルシャ語で書かれてきた。そこで発表では主に6つのペルシャ語音楽書におけるリズム理論が資料を提示しながら詳しく解説された。その結果として、当初は古典的なサンスクリット語の音楽書の理論を踏襲していたのが、18世紀頃にペルシャの影響が反映されるようになったことが示された。さらに、こうした音楽書で提示されているリズム型と現在演奏で用いられているリズム型が部分的に一致する例があることが口唱歌の実演とともに示された。とはいえペルシャの影響が現代のヒンドゥスターニー音楽にどれほど／どのように及んでいるのかについては今後慎重に見ていく必要がある点も示された。

質疑ではペルシャの影響の時代的な深さやその広がりについて、そして音楽書に示された理論と実践の関係を巡る質問がなされた。こうした質問に対し、発表者からは本研究が音楽書の分析に焦点を絞ったものであるため実際の実践レベルで見れば異なった様相がありうること、実演については口伝で教えられるのが基本であり実際の音楽演奏についてはよくわからないことが説明された。また、当時の音楽書が実践から完全に離れているとは考えにくい、古典的な理論を踏襲した記述と実際の演奏から出てきた記述を分けて考えてもよいかもしれないことも示された。またヒンディー語やサンスクリット語の文献だけではわからな

いペルシャの影響について具体的に検証した点について評価するコメントや、インドの西洋音楽受容に関する質問もなされた。

今回の発表の意義は、発表者自身の演奏習得経験に裏打ちされた文献の読み込みからペルシャとインドという異なる文化の融合を検証した点にあったように思われる。この、実践に裏打ちされた文献読解にこそ本研究の高い価値があるが、発表者も質疑で述べていたように今後は18世紀から現代の演奏実践の間にどのようなつながりがあるのか、歴史学的研究と民族音楽学的な研究をより緊密に結び付けた研究が期待される。
(梶丸 岳記)

《小泉文夫音楽賞受賞記念講演》1

講演者：パトリシア＝シーアン・キャンベル

講演内容：“Keeping Music at the Core of a Culturally Conscious Pedagogy”

〈報告〉

第28回小泉文夫音楽賞を受賞されたパトリシア＝シーアン・キャンベル教授は、音楽教育と民族音楽学を専門としており、現在ワシントン大学のDonald E. Petersen Professorなどを務めている。冒頭に紹介された授賞理由では「民族音楽学と音楽教育学の間に初めて太い橋を架けた」ことが指摘されていたが、講演でも民族音楽学的な音楽理解に根差した音楽教育論を展開していただいた。

サウンドとしての音楽という理解を退け、ホーリスティックな音楽理解をキャンベル氏は提案する。個人の内部に目を向けるならば、音を知覚するのみならず、それに対して身体的に反応することができる。複数の個人の間では、音楽を用いることで関係性が築き上げられている。そして、音楽は社会的文化的な意義を担っている。

キャンベル氏が述べる音楽教育も、このようなホーリスティックな音楽理解に基づいて提唱される。サウンドとしての音楽の内在的性質を尋

ねるのみならず、なぜそのような音楽が作られたのか、その音楽は社会の中でどのような役割を担っているのか、といった質問も音楽教育は可能である。音楽をサウンドに閉じ込めることなく、文化や社会の中に広く根付いたものとして教えることが、氏の音楽教育論の一つの特徴といえる。もう一つの特徴が、個人が持つ音楽の生得性と呼びうるものの尊重である。言葉を習得する以前より、子どもは声を出し、音に合わせて動き、手を打つ。そうした「すでに個人が知っている音楽」の重要性が強調もされている。

西洋芸術音楽のみを教育することに対するキャンベル氏の批判は強烈である。そうした偏りは、社会正義の観点から見て、非倫理的(unethical)である。ワールド・ミュージックを排除するのではなく、それを統合した音楽教育のカリキュラムが求められると氏は述べている(この点に関して、学校の教師は伝統音楽のオーセンティックな教育者ではないという現実的制約に関する質問があった)。

キャンベル氏の講演を聞いて、レポーターは音楽に対する自分の立ち位置を反省する機会をいただいた。そして、いろいろなことを考えさせられた。例えば、日常生活の中で容易に音楽に接続ができるようになり、個人が自由に音楽環境を構築できるようになった今日、「サウンドとしての音楽」という理解は、キャンベル氏が述べた西洋芸術音楽にまつわるイデオロギーとは別の形で、実践的かつ実感に沿う仕方で人々に深く浸透しているようにも思われる。こうした現状をどのように理解・評価するべきなのか。また、こうした現実の中でキャンベル氏の掲げるホーリスティックな音楽理解を生徒に教えるには、どうすればよいのだろうか。多くの考えるべき重要な問題が私たちに与えられたように思われる。

日本音楽学会 田邊健太郎 (立命館大学)

《小泉文夫音楽賞受賞記念講演》 2

講演者：時田アリソン

講演内容「東アジアとオーストラリアの音楽と近代：芸術歌曲を事例にして」

〈報告〉

時田アリソン氏の講演は「東アジアとオーストラリアの音楽と近代：芸術歌曲を事例にして」をテーマとして行なわれた。時田氏は、日本の語り物の研究により小泉賞を受賞したが、東京での授賞式の際にすでにこのテーマで講演を済ませていたため、西日本支部での講演は重複を避け、氏が近年共同研究者たちとともに取り組んでいる上記のテーマで行なわれた。

講演の最初に、まず 1900-1950 年の東アジアとオーストラリアを一緒にとりあげる理由が説明された。東アジア諸国の多くが植民地ないし半植民地から独立して生まれているのと同様に、オーストラリアも 1901 年にイギリスから独立してオーストラリア連邦となっており、国家の成立状況が似ている点があげられた。また近代の国民的アイデンティティ形成の時期が近く、洋楽受容の経験も似ているなど、いくつかの共通点があげられた。こうした国々においては、西洋のモダンにあこがれながら、アイデンティティを失う恐れ、またジレンマがあり、そうしたなかで国民的な音楽表現を希求し、国民的作曲法の可能性を模索することになっていった。中国や日本を訪れたアレクサンドル・チェレプニンの「アジアの作曲家はアジア的な作曲をすべき」という言葉が、大きく影響したという。

芸術歌曲の役割ないし特徴としてつぎの 5 点があげられた。1. 世界的な傾向だが、ローカルな国民性を支える。2. 自国語の歌詞を持つ。3. 固有の音楽文化の要素がある。4. 内的「他者」（日本の場合はアイヌ）の音楽を利用する。5. グローバルなジャンルがローカルなものを形成する。

つぎに各国の芸術歌曲の実例がとりあげられ、紹介された。韓国からは金順男の《つつじの花》。金はプロレタリア音楽の影響を受け、後に北に渡った作曲家である。中国歌曲としては陳田鶴の《山中》など 5 曲があげられた。またオーストラリアからは、ユダヤ系の女性作曲家リンダ・フィリップスの“Cradle Song”が紹介され、その澄んだ響きが印象に残った。

この研究において興味深い点は、東アジア諸国と日本との入り組んだ関係、そして西洋文化を継承するオーストラリアと東アジア諸国との関係である。東アジア諸国の作曲家たちは日本に留学することが多く、陳のように留学しない場合も、すすんで日本から学ぼうとした。そのため、日本の芸術歌曲と類似したスタイルが生まれた。またオーストラリアは内的他者であるアボリジニの音楽を使うことを政治的に避ける傾向にあり、そのためアジアに目を向けた結果、オリエンタリズム、ジャポニズム、シノワズリーもしばしば見られるようになったという。このような指摘は東アジアとオーストラリアという独自のテーマ設定だからこそもたらされたものであると言えよう。

今回の講演では、1950年までに時代を限定したことによって、相違点よりもむしろ共通点、相互の影響関係が強調されることになった。芸術歌曲は西洋音楽を受容したそれぞれの国で発達したジャンルであり、ひとつの国や地域の歴史としてよりも、世界規模でとらえられる可能性も秘めている。2017年3月東京で開催された国際音楽学会では「音楽のグローバル・ヒストリー」がとりあげられていたが、東アジアとオーストラリアの「芸術歌曲」という研究テーマはそうした新たなパラダイムにも繋がる可能性を含んでいるように思われた。

日本音楽学会 柿沼敏江 (京都市立芸術大学)

* * * * *

■入会申し込み・住所変更について

(一社) 東洋音楽学会への入会をご希望の方は、82円切手を同封し、下記の学会事務所へ入会案内・申込用紙をご請求ください。申込用紙は、ホームページからもダウンロードできます。会員の異動や住所変更等についても、下記の学会事務所へお知らせください。申し出先は支部事務局ではありませんのでご注意ください!

一般社団法人 東洋音楽学会 学会事務所
〒110-0005 東京都台東区上野3-6-3 三春ビル307号室
TEL 03-3832-5152, FAX 03-3832-5152
ホームページ <http://tog.a.la9.jp/>

■研究発表の募集

西日本支部定例研究会での研究発表を希望される方は、発表種別(研究発表・報告等)、発表題目、要旨(800字以内)、氏名、所属機関、連絡先(住所、電話、FAX、E-mail)を明記の上、下記の西日本支部事務局までお申し込みください。

東洋音楽学会 西日本支部事務局
〒610-1197 京都市西京区大枝沓掛町13-6
京都市立芸術大学 日本伝統音楽研究センター 藤田研究室気付
TEL 075-334-2392, E-mail tfujita@kcua.ac.jp

支部だより 第86号

発行：東洋音楽学会 西日本支部 担当：武内 恵美子、出口 実紀
〒610-1197 京都市西京区大枝沓掛町13-6
京都市立芸術大学 日本伝統音楽研究センター 藤田研究室気付
TEL 075-334-2392, E-mail tfujita@kcua.ac.jp